

# 状態変化を表す「～ようになる」は どのような中国語に翻訳されるのか

渡 邊 ゆかり

Chinese Expressions into Which Japanese  
“~yooni-naru” Could be Translated

WATANABE Yukari

## 要 旨

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者の「動詞ようになる」の習得上の問題を扱った渡邊（2019）を受け、近代の日本文学作品に現れる、状態変化を表す「～ようになる」がどのような中国語に翻訳されやすいのか、また、それはなぜなのかについて調査、分析を行った。本調査では、近代の日本文学作品10作品とこれらが中国語に翻訳された10作品をテキストとして使用した。調査の結果、中国語の翻訳文では、「～ようになる」が表す変化により発生した新事態のみを描くものが半数近くを占めていたこと、それ以外の訳し方には多様性が見られることが明らかとなった。また、この理由の一つとして、中国語の語りでは、定着度の高い事態Aが、別の定着度の高い事態Bへと移行する全過程にスポットライトを当て一つの文として描く表現方法がなじまないことが示唆された。

キーワード：「～ようになる」、状態変化、中国語訳、語りのスタイル、スポットライト

## 1. は じ め に

「～ようになる」には、「太郎は医者に勧められ、毎朝ジョギングをするようになった」のように状態変化を表す用法が存在する。この状態変化を表す「～ようになる」については、先行研究により、中国語母語話者にとって習得が困難であることが指摘されている。

例えば、植松（2016）は、「中国語母語話者においては、日本語母語話者と比べて『ようになる』の使用が少ないことが観察される（p. 27）」と述べている。また、菊池（2017）も、台湾人日本語学習者について「『動詞ようになる』を使用すべきところで使用していなかったり、ほかの表現を用いたりする例が見られる（p. 31）」と述べている。

では、なぜ、中国語母語話者にとって「～ようになる」の習得が困難なのであろうか。

菊池は、この点について「動詞ようになる」文に対応する中国語文に「变」<sup>1</sup>などの変化を表す動詞が含まれることが少ないため、日本語の表現を考える際に「動詞ようになる」が現れにくいと考えた。

また、渡邊(2019)は、「動詞ようになる」文に対応する中国語文に「变」などの変化を表す動詞が含まれることが少ない原因について、次の三要素のいずれかを用いることで、対応する中国語文に変化の意味が付与されるためではないかと指摘した(p. 12)。

- 対応中国語文が表す事態の発生を誘発した事態を表す表現
- 対応中国語文が表す事態への移行時期を表す表現(例: 后来)
- 対応中国語文が表す事態へ移行する際の様相を表す表現(例: 渐渐)

しかしながら、そもそも語りのスタイルが中国語と日本語とで異なることに起因する可能性も無視できない。

そこで、本研究では、語りのスタイルに着目しながら、近代の日本文学作品において状態変化を表す「～ようになる」がどのような中国語に翻訳されるのか、また、その原因が何であるのかについて分析を行う。

## 2. 先行研究

「～ようになる」の先行研究のうち、どのような中国語に翻訳されるかについて言及しているものとしては、植松、菊池を挙げることができる。

このうち、植松は、日本語教科書の対訳版と中国で発行されている日本語の教科書計8冊を対象に、「～ようになる」がどのような中国語で表されているかを調査し、次のようなパターンを抽出した。

- A 文末の「了」を使用
  - A-1 可能を表す形式+了(会/能/可以…了)
  - A-2 了のみ
- B 「就」を使用
  - B-1 就+可能を表す形式(就…会, 能)
- C その他
  - C-1 可能を表す形式のみ
  - C-2 その他

植松によれば、教科書調査の結果得られた23例のうち、最も多かったパターンは、Aの文末

の「了」を使用したパターンであり、全体の70%を占めていたという。植松の調査対象は、いずれも日本語学習用の教材であり、この結果が日本語学習を意図していない文学作品の翻訳にも当てはまるかどうかは不明である。

また、菊池は、グループ・ジャマシイ編（1998）の中国語訳繁体字版（2001）に存在する「～ようになる」とその中国語訳を調査し、「日本語の『動詞ようになる』で表されるべきことは、中国語においては変化にかかわる動詞によって示されるとは限らない（pp. 33-34）」とした。しかし、菊池ではその理由について言及していない。

渡邊は、この点に関し、1節に示した三要素のいずれかを用いることで、対応する中国語文に変化の意味が付与されるためではないかと指摘した。しかし、1節で述べたように、語りのスタイルが中国語と日本語とで異なることに起因する可能性も十分に考えられる。

本研究では、これらの先行研究の結果を踏まえ、近代の日本文学作品とその中国語訳を対象に、状態変化を表す「～ようになる」がどのような中国語に翻訳されているのかを調査するとともに、その原因について分析する。

### 3. 方 法

#### 3.1 調査対象としたテキスト

本調査で対象としたテキストは、以下の10作品である。

- 夏目漱石（1867生-1916没）1.「吾輩は猫である」 2.「三四郎」 3.「こころ」  
谷崎潤一郎（1886生-1965没）4.「痴人の愛」 5.「細雪」上  
堀辰雄（1904生-1953没）6.「風立ちぬ」 7.「菜穂子」  
太宰治（1909生-1948没）8.「惜別」 9.「斜陽」 10.「人間失格」

これらを用いたのは、「青空文庫<sup>2</sup>を用いて用例検索が可能であること」「中国語訳の書籍が中国で出版されていること」による。使用した日本語書籍と中国語書籍は、巻末に記した。

#### 3.2 分析対象とした言語形式

渡邊では、「動詞ようになる」の形式を分析対象としたが、本研究では、動詞に後接する「ようになる」だけでなく、次の(1)(2)のように、形容詞や否定の助動詞「ない」「ん」に後接する「ようになる」も扱った<sup>3</sup>。なお、これ以降の用例中で用いられる下線はいずれも稿者による。

- (1) 「へえどうか、何だかちと、危い様になりそうですね」（吾輩は猫である、2）  
(2) 「うん、こんな物までぶら下げなくちゃ、ならん様になってね」（吾輩は猫である、4）

また、「ように」が次の(3)のように、比喩を表す助動詞「ようだ」の連用形として用いられているものは、分析対象から外した。

(3) 三昼夜、自分は死んだようになっていたそうです。(人間失格, 第三の手記, 2)

さらに、「～ようになる」の用例は、青空文庫のテキストから抽出したが、その際、「ようになる」「ようになり」「ようになって」「ようになった」の4形式を検索キーワードに用いた。したがって、「ようになら(ず/なく/ない/なかった)」「ようになれ(ば)」といった形式を取る表現は調査対象に含まない。

このような方針のもとで収集した「～ようになる」は、合計で207例であった。

### 3.3 分析手順

まず、調査対象とした日本語テキストにおける「～ようになる」の特徴について分析する。今回調査対象とした日本語テキストは、近代に執筆された小説であり、この中には、現代の規範的用法からやや外れた「～ようになる」も存在する。そこで、このような「～ようになる」がどのようなものであるかについて見ていく。

次に、近代の日本文学作品中の「～ようになる」が中国語に翻訳される時の翻訳パターンについて分析する。その際、まず、「～ようになる」の主語と翻訳文の主語が対応しない場合の翻訳パターンについて分析し、その後、主語が対応する場合の翻訳パターンについて分析する。なお、本分析においては、「考えられる」「わかる」といった認識動詞と結びつく二格の主体も主語として扱う。

最後に、これらの分析結果に基づき、中国語の語りのスタイルと「～ようになる」の翻訳パターンとの関係について考察する。

## 4. 調査結果

### 4.1 現代の規範的用法から外れた「～ようになる」

状態変化を意味する「～ようになる」は、庵(2000)の言葉を借りれば、「それまで存在していなかった状態が現在は存在するということを表(p.75)」す。しかしながら、近代の日本文学作品にはこの用法からやや外れたものも存在する。以下、具体例を見ていく。

第1の例は、状態変化というより、むしろ、ある事柄が自然の成り行きや外的要因によって決まったことを表しているものである。次の(4)がこれに該当する。

(4) 私は最初、今度はまさか金波楼でもあるまいから、少し気の利いた旅館へ泊るつもりでしたが、それが図らずも間借りをするようになったのは、(痴人の愛, 14)

この場合、「ようになった」は「ことになった」に言い換え可能である。この種の「ようになる」は、合計で7例（「吾輩は猫である」1例、「三四郎」1例、「痴人の愛」3例、「菜穂子」2例）存在した。

第2の例は、推論の帰結を表しているものである。次の(5)がこれに該当する。

- (5) あなたから過去を問いただされた時、答えることの出来なかった勇気のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従って、それを利用出来る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸すようになります。（こころ、中、17）

この場合も「ようになる」は「ことになる」に言い換え可能である。この種の「ようになる」は、合計で2例（「こころ」1例、「痴人の愛」1例）存在した。

第3の例は、「ようになる」に埋め込まれた節が、持続性、反復性を持たない1回切りの意志動作を表しており、変化後の状態を表しているとはみなしがたいものである。次の(6)がこれに該当する。

- (6) よく世間では、息子がだんだん大きくなり、郷里を捨てて都会へ出るようになってしまうと、親は何かと心配したり、（痴人の愛、24）

この場合、「～ようになる」に埋め込まれた節は、1回切りの主体動作を表している。それゆえ、現代語においては、次の(6')のように「ようになる」を用いない方がむしろ自然である。

(6') よく世間では、息子がだんだん大きくなり、郷里を捨てて都会へ出てしまうと、この種の「ようになる」は、合計で5例（「こころ」2例、「痴人の愛」2例、「細雪」1例）存在した。ただし、これらの例においては「ようになる」に埋め込まれた節が、換喩的に主体動作後の状態を表しているととれないこともない。例えば、(6)の「郷里を捨てて都会へ出る」は、換喩的に「都会で暮らす」という持続性のある事態を表しているともとれる。しかし、いずれにしろ、現代語の規範的用法から外れるのでこれ以降で記述する分析対象から外す。

以上が、現代の規範的用法からやや外れる用例である。これ以外のものについては、いずれも、それまで存在していなかった状態が現在は存在することを表している。また、その用例の多くは、「ようになる」に埋め込まれた節が、次の(7)のように持続動作を表したり、(8)(9)のように反復事態を表していた。

- (7) たとい終身、刑務所で暮すようになったとしても、（人間失格、第二の手記）

- (8) 自分の顔の表情は極度にいやしくなり、朝から焼酎を飲み、歯がぼろぼろに欠けて、

漫画もほとんど猥画に近いものを画くようになりました。(人間失格, 第三の手記, 2)

- (9) 妙子は女学校時代から人形を作るのが上手で、暇があるとよく小裂を切り刻んでいたずらしていたものであったが、だんだん技術が進歩して、百貨店の陳列棚へ作品が出るようになった。(細雪, 上, 3)

しかしながら、一見すると「ようになる」に埋め込まれた節が、1回きりの主体の状態変化を表しており、主体の状態を表しているとはみなしがたいものも存在した。次の(10)がこれに該当する。

- (10) 仕方がないからただ友達が金を失くして弱っていたから、つい気の毒になって貸してやった。その結果として、今度は此方が弱る様になった。(三四郎, 9)

この場合、「ようになる」に埋め込まれた節は、「こっちが弱る」という変化の結果生じた「こっちが弱った」状態を換喩的に表している。もっとも、「弱る」は、もともと状態変化を表す動詞なので、次の(10')のように「ようになる」をあえてつけなくても状態変化の意味は成立する。

- (10') 仕方がないからただ友達が金を失くして弱っていたから、つい気の毒になって貸してやった。その結果として、今度は此方が弱った。

ゆえに、このような用法も現代語の規範的用法からやや外れているととれなくもない。しかしながら、(10)のように状況変化を表す文に限り、現代語においても「ようになる」に埋め込んで用いる例が認められるので、このような用法も本調査対象に含めた。

以上、ここでは、現代の規範的用法からやや外れた「ようになる」の用法の特徴を見てきた。次の4.2では、今回の調査で収集した207例のうち、現代の規範的な用法からやや外れた「～ようになる」を除く193例を対象に、「～ようになる」がどのように翻訳されているかについて見ていく。

#### 4.2 「～ようになる」の主語と翻訳文の主語が対応しない場合

「～ようになる」と翻訳文とを比較する上では、まず原文と翻訳文とで主語が一致しているかを確認する必要がある。なぜなら、「～ようになる」は、主体の状態変化を表す表現であり、翻訳文においてもこの意が受け継がれているか否かを見る際には、原文と翻訳文とで主語が一致していることが前提となるからである。

調査対象とした193例の「～ようになる」のうち、翻訳文の主語が原文と一致しないものは28例であった。この28例の翻訳方法は次の①～⑤に分類できる。

##### 主語が対応しない「～ようになる」の翻訳方法

- ①「～ようになる」が表す状態変化の結果を表す文に翻訳する。

- ②「～ようになる」が表す状態変化の原因を表す文に翻訳する。
- ③名詞句に翻訳する。
- ④「～ようになる」に埋め込まれた節が「～と思う」という述語文であり、この「～と思う」の心的内容を表す文に翻訳する。
- ⑤翻訳の出版された国の自然環境になじむ表現に翻訳する。

次の(11)－(15)は、これらの具体例に相当する。

①の例

- (11) a. しかし明はますます気むずかしくなって、相手には滅多に口さえ利かせないよう  
になった。(菜穂子, 8)
- b. 可是, 明变得越来越难以助悦, 早苗甚至都很少开口说话了。(菜穂子, 8)

②の例

- (12) a. この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来ますますひとの徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。(こころ, 下, 3)
- b. 这一稟性想必在伦理上影响到一个人的行为, 动作, 使得我日后愈发怀疑起别人的道义之心。(心, 下, 3)

③の例

- (13) a. 運動をしろの, 牛乳を飲めの冷水を浴びろの, 海の中へ飛び込めの, 夏になったら山の中へ籠って当分霞を食らえのとくだらぬ注文を連発する様になったのは, 西洋から神国へ伝染した輓近の病気で,(吾輩は猫である, 7)
- b. 提倡喝牛奶呀, 进行冷水浴呀, 应该跳进海去, 夏季应该去山里同烟霞为伴等等, 所有这些无聊的提法, 都是从西方传到神国日本来的, 是近期才发生的一种热,(我是猫, 7)

④の例

- (14) a. いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。(こころ, 下, 14)
- b. 而是任何时候都双双存在于夫人的胸际。(心, 下, 14)

⑤の例

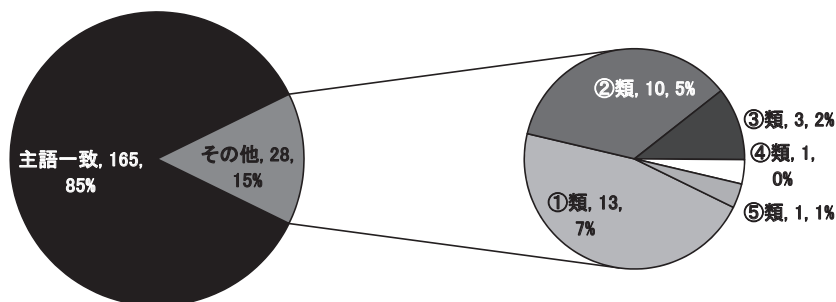
- (15) a. そうして、菊が咲いて、うらかな小春日和がつづくようになると,(斜陽, 5)
- b. 然后菊花也开了, 若每天都是秋高气爽的舒适天气,(斜陽, 5)

「～ようになる」文の主語と翻訳文の主語の一致度、ならびに、この①～⑤の用例数は、グラフ1のとおりである。

グラフ1より、主語の一致度は約85%と比較的高いこと、主語が一致しない翻訳文において



は、①類、②類といった「～ようになる」が表す事態と因果関係にある事態を表す文が用いられやすいことがわかる。

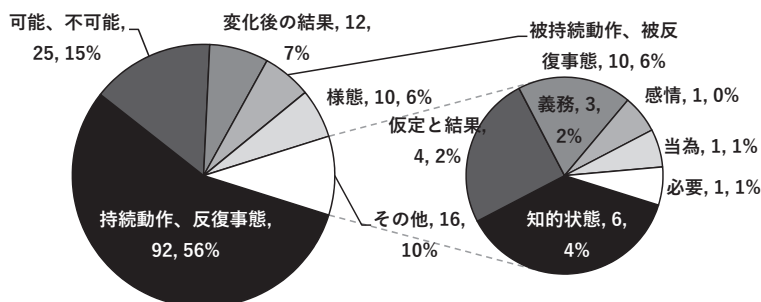


グラフ1 「～ようになる」文の主語と翻訳文の主語の一致度

#### 4.3 「～ようになる」の主語と翻訳文の主語が対応する場合

##### 4.3.1 「～ようになる」に埋め込まれた文が表す事態

ここでは、「～ようになる」の主語と翻訳文の主語が一致した165例の翻訳パターンについて分析する。まず、「～ようになる」に埋め込まれた節がどのような事態を表しているかを調べたところ、結果はグラフ2のとおりであった。



グラフ2 「～ようになる」に埋め込まれた節が表す事態

グラフ2より、「持続動作、反復事態」が約56%を占めていることがわかる。次いで多かったのは、「可能、不可能」であったが約15%とさほど多くはない。三番目に多かったのは、「変化後の結果」で約7%であった。

次の4.3.2では、この「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」計129例がどのように翻訳されているかを見ていく。

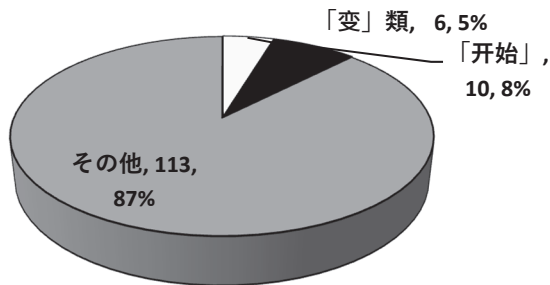


#### 4.3.2 事態の切り替わりを表す動詞の有無

以下、まず、翻訳文において、事態の切り替わりを表す以下の動詞がどの程度用いられているかについて見ていく。

- 変化を表す動詞「变得」「变成」「变为」
- 開始を表す動詞「开始」

次のグラフ3は、「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」の翻訳文において、変化を表す動詞「变得」「变成」「变为」が使用された数と、開始を表す動詞「开始」が使用された数を示している。



グラフ3 「変」類、「开始」の使用頻度

グラフ3に示すとおり、「変」類は計6例、「开始」は計10例であった。これは、各々「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」の翻訳文129例中の約5%と約8%にあたる。このように、これらの動詞の使用率は極めて低い。

では、「変」類、「开始」は、どのような場合に用いられているのであろうか。

まず、「変」類を取り上げる。「変」類が使用された6例を分析したところ、これらが表す変化は、次の三つに分類できた。

- 主体の本来的な特性の変化（4例）
- 主体に備わった本来的な価値の変化（1例）
- 主体の行動に備わる本来的な目的の変化（1例）

次の(16)–(18)はこれらの具体例である。

##### 主体の本来的な特性の変化

(16) a. 世間というもの、個人ではなかるうかと思いはじめてから、自分は、いままでよりは多少、自分の意志で動くことができるようになりました。(人間失格、第三の手記、1)

b. 开始认为世人就是个人之后，我变得更能靠自我意志去行动了。(人间失格、第三手

札, 1)

#### 主体に備わった本来的な価値の変化

- (17) a. そのためこうした時間の推移までが、私には今までとは全然異った意味を持つようになり出したのであろうか？ (風立ちぬ, 序曲)
- b. 因而就连这样的时光流逝, 于我而言也变得拥有了与迄今全然不同的意义? (起风了, 序曲)

#### 主体の行動に備わる本来的な目的の変化

- (18) a. 奥さんの姿を一目見たくて、あの洋画家の家へ遊びに行くようになりました。 (斜陽, 7)
- b. 后来竟变成为了想见他的太太, 而不时去拜访这位西画家。 (斜陽, 7)

いずれも、本質的、本来的なものの変化を表している。このことから、「変」類が表す変化は、本質的、本来的変化であり、本質性、本来性を伴わない変化には用いないことが推察される。

次に、「开始」を取り上げる。「开始」は、事態の切り替わりを表すといえども、スポットライトは、事態が切り替わった後の新事態に当てられており、事態が切り替わる時点が新事態のスタート時点として意味づけられている。この「开始」が用いられていた10例は、いずれも「よくなる」に埋め込まれた節が持続動作、反復事態を表していた。また、「～よくなる」が表す変化は、次の二つに分類できた。

- 主体の行動様式の変化 (6例)
- 主体の思考様式の変化 (4例)

次の(19)(20)はこれらの具体例である。

#### 主体の行動様式の変化

- (19) a. 私は月に二度もしくは三度ずつかならず先生の宅へ行くようになった。 (こころ, 上, 7)
- b. 我开始每月出入先生家门两至三次。 (心, 上, 7)

#### 主体の思考様式の変化

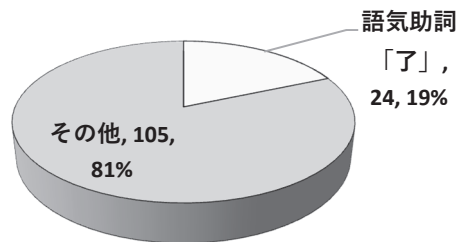
- (20) a. 自分は世の中に対して、次第に用心しなくなりました。世の中というところは、そんなに、おそろしいところではない、と思うようになりました。 (人間失格, 第三の手記, 1)
- b. 我逐渐对这个世界不再小心翼翼, 开始觉得这世界并没有这么可怕。 (人間失格, 第三手札, 1)

「主体の行動様式の変化」「主体の思考様式の変化」のいずれも、翻訳文では、変化後に現れる新しい行動様式、思考様式の開始として描かれている。

以上、ここでは、翻訳文中に現れる、事態の切り替わりを表す動詞の存在に着目して分析を行った。次に、同じく事態の切り替わりを表す語気助詞「了」の存在に着目する。

#### 4.3.3 語気助詞「了」の有無

語気助詞「了」は、楊（2001）によれば、「新しい事態の発生・変化を確認する」働きを持つ。植松が日本語の教科書を対象に行った調査では「～ようになる」の中国語訳の70%にこの語気助詞「了」が使用されていた。本研究では、4.3.2と同様「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」計129例の翻訳文において語気助詞「了」がどの程度使用されているかを調査した。結果は次のグラフ4のとおりである。



グラフ4 語気助詞「了」の使用頻度

グラフ4に示すとおり語気助詞「了」が用いられていたのは24例である。これは、「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」の翻訳文129例中の約19%に当たる。このように、近代の日本文学作品に現れる「～ようになる」の翻訳文に語気助詞「了」が用いられる割合は低い。

以上、ここでは、翻訳文中に現れる、語気助詞「了」の存在に着目して分析を行った。次に、動詞「変」類、動詞「开始」、語気助詞「了」を伴わない翻訳文の特徴について分析を行う。

#### 4.3.4 動詞「変」類、動詞「开始」、語気助詞「了」を伴わない翻訳文

ここでは、「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」の翻訳文のうち動詞「変」類、動詞「开始」、動詞「了」を伴わない翻訳文の特色を分析する。このような翻訳文は、「～ようになる」が表す変化によって出現する新事態との関わりから次の五つに分類できる。

- 新事態のみを表す
- 新事態への到達を表す
- 新事態を生産する動作を表す

- 新事態の発生・開始を表す
- 新事態の必要性を表す
- その他

次の(21)–(25)は、上記のうち「その他」を除く具体例である<sup>4</sup>。

#### 新事態のみ

- (21) a. いままでの怠惰な烏も、それからはせつせと学校へ通うようになったし、(惜別)  
 b. 一扫从前的**懒惰**，每天勤奋学习，(惜別)

#### 新事態への到達

- (22) a. 彼女が他日立派な婦人になるであろうと云うような望みは、今となつては全く夢であったことを悟るようになったのです。(痴人の愛，7)  
 b. 日后她变成了了不起的**妇人的希望**，现在的我已觉悟到这完全是梦。(痴人之爱，7)

#### 新事態を生産する動作

- (23) a. 誰か注意する者があつたと見えて、間もなく「エツコさん，エツコさん」と呼ぶようになり、(細雪，上，8)  
 b. 后来不知是谁提醒了她，才改称为“**悦子姐姐**”。(细雪，上，8)

#### 新事態の発生・開始

- (24) a. そのうちに私も上原さんの小説を本気に読むようになって、(斜陽，3)  
 b. 当时我也认真地读起上原先生的小说来。(斜阳，3)

#### 新事態の必要性

- (25) a. 四百円の収入で以上の負担に堪えるのは容易でなく、貯金どころかあべこべに貯金を引き出すようになり、(痴人の愛，9)  
 b. 四百日元的收入自然不易应付这些**开销**，不要说存钱什么的，还要从存款簿里提款。(痴人之爱，9)

これらのうち翻訳文が新事態のみを表している(21b)では、新事態は持続性のある事態として解釈可能であるが、次の(26b)のように1回きりの動作、すなわち、持続性のない事態として解釈可能なものも存在した。ただ、いずれであるかの判別は難しく、ここでは、このような例もこのグループに含めた。

- (26) a. こんな会話があってから、ちょうど幸い行水の季節になって来たので、私は再び、物置きの隅に捨ててあった西洋風呂をアトリエに運び、彼女の体を洗ってやるようになりました。(痴人の愛，14)  
 b. 由于有这样的对话，刚好沐浴的季节来临，我又把闲置在角落的西洋浴槽搬到画室，帮她洗身体。(痴人之爱，14)

また、翻訳文が新事態への到達を表している (22) では、述語動詞に結果補語「到」が用いられており、「现在的我觉悟这完全是梦」という事態に到達したことを表している。このグループでは、事態が切り替わる前から事態が切り替わる時点までにスポットライトが当てられており、事態が切り替わる時点は、新事態への到達点として意味づけられている。また、このグループの翻訳には、このほか、次の (27b) のように、動態補語の「了」が用いられているものも存在した。

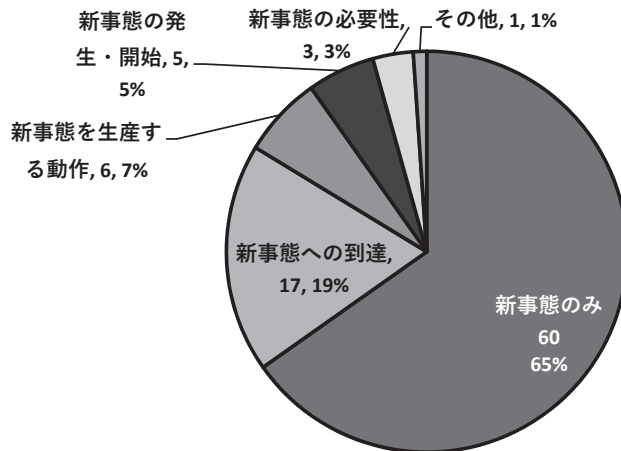
(27) a. ところがだんだんそれが習慣になるに従って, ナオミは真に強い自信を持つようになり, (痴人の愛, 7)

b. 可是, 渐渐地成了习惯, 娜奥密有了强烈的自信, (痴人之爱, 7)

さらに、翻訳文が新事態の発生・開始を表している (24b) では、発生・開始を表す方向補語「起来」が使用されている<sup>5</sup>。このグループの翻訳にはこの方向補語「起来」が用いられていた。

このほか、翻訳文が新事態の必要性を表す (25b) では、新事態を表す「从存款簿里提款」の前に必要性を表す「要」が用いられている。このグループの翻訳には、このほか「必须」も用いられていた。

これらの種類の翻訳文の比率は、グラフ5のとおりである。



グラフ5 動詞「変」類, 動詞「开始」, 語気助詞「了」を伴わない翻訳文

グラフ5より、動詞「変」類, 動詞「开始」, 語気助詞「了」のいずれも伴わない翻訳文の中では、新事態のみを表す翻訳文が最も多く用いられていることがわかる。動詞「変」類, 動詞「开始」, 語気助詞「了」を伴わない翻訳文92例の中での使用率は約65%である。動詞「変」類,

動詞「开始」、語気助詞「了」を伴うものも含めた翻訳文129例を分母とした場合も、約47%である。このように、新事態のみを描写するという翻訳の仕方は、特別高いわけではないものの、低くはない。

以上、ここでは、「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」の翻訳文のうち、動詞「変」類、動詞「开始」、語気助詞「了」を伴わない翻訳文の特色を分析した。次の5節では、ここまでの分析結果を踏まえ、近代の日本文学作品中の「～ようになる」がどのような中国語に翻訳される傾向にあるかを示すとともに、その理由を考察する。

## 5. 考 察

表1は、「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」の翻訳方法を頻度の高いものから順に並べたものである。なお、1位から9位までの頻度の累計132例が、「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」の翻訳文の累計129例と一致しないのは、動詞「変」類と語気助詞「了」が同時に用いられているもの1例、動詞「开始」と語気助詞「了」が同時に用いられているもの1例、結果補語「到」と動態助詞「了」が同時に用いられているもの1例が存在したことによる。

表1からは、全体としての比率が特に高いわけではないが、新事態のみを表すという翻訳方法が最もよく用いられていることがわかる。

次いで多いのが語気助詞「了」を用い、新事態の発生・変化を表すものである。ただし、比

表1 「持続動作、反復事態」「可能、不可能」「変化の結果」を表す節が埋め込まれた「～ようになる」の翻訳方法

順位	翻訳方法	頻度	比率
1	新事態のみを表す	60/129	46.5%
2	語気助詞「了」を用い、新事態の発生・変化を表す	24/129	18.6%
3	結果補語「到」や動態助詞「了」を用い、新事態への到達を表す	17/129	13.2%
4	動詞「开始」を用い、新事態の開始を表す	10/129	7.8%
5	動詞「変」類を用い、本来的、本質的变化を表す	6/129	4.7%
5	新事態を生産する動作を表す	6/129	4.7%
7	方向補語「起来」を用い、新事態の発生・開始を表す	5/129	3.9%
8	動詞「要」「必须」を用い、新事態の必要性を表す	3/129	2.3%
9	その他	1/129	0.8%

率は約18.6%と高いわけではない。語気助詞「了」は、「的+名詞」に前接する連体修飾節に使えないなどの統語制約があり、このことも使用率の低さに影響していると考えられる<sup>6</sup>。

語気助詞「了」と同様、新事態への切り替わりを表す要素を用いているものには、これ以外にも、3位、4位、同率5位のうち動詞「変」類を用い、本来的、本質的变化を表すもの、7位が存在する。ただし、これらは、事態が切り替わる前から事態が切り替わった後までのどの範囲にスポットライトが当てられているのか、事態の切り替わる時点がどのように意味づけられているのかがそれぞれ異なる。同率5位のうち動詞「変」類を用い、本来的、本質的变化を表すものについては、スポットライトの当たる範囲、事態の切り替わる時点の意味づけが「～ようになる」と類似してはいるが、4.3.2で見たように「～ようになる」より意味が限定されている。

以上より、「～ようになる」の翻訳文の特色は以下の三つにまとめることができる。

- ①「新事態のみを表す文」が半数近くを占める。
- ②「新事態のみを表す文」以外では、「事態の切り替わりを表す文」がよく用いられている。
- ③事態の切り替わりを表す要素は、語気助詞「了」、結果補語「到」、動態助詞「了」、動詞「开始」、動詞「变」、方向補語「起来」と多種多様である。これらは、品詞が異なるだけでなく、事態が切り替わる前から事態が切り替わった後までのどの範囲にスポットライトを当てているのか、事態の切り替わる時点をどのように意味づけているのかが異なっている。

では、なぜ、このような特色が存在するのであろうか。

まず、①の理由について考えると、その一つとして、先行研究ですでに指摘されているように、意味ならびに統語構造が「～ようになる」とかなりの程度合致する形式が中国語に存在しないことが挙げられる。新事態の発生・変化を表すとされる語気助詞「了」は、話し手の気づきを表すモダリティ要素の一つでもあり、この点において変化を客観的に描写する「ようになる」とは性格が異なる。また、変化を表す動詞「变」類も、その意味は、「ようになる」と類似するものの、「ようになる」より限定されている。

これらのことは、裏返せば、中国語の語りでは、渡邊で示した「～ようになる」の意味に沿う事象の描き方、すなわち、定着度の高い事態Aが、別の定着度の高い事態Bへと移行する全過程にスポットライトを当て一つの文として描く表現方法がなじまないことを示唆する。

次に、②の理由は、意味ならびに統語構造が「～ようになる」とかなりの程度合致する表現形式というものがそもそも中国語に存在せず、より近い表現として事態の切り替わりを表す要素を含む文が選択される傾向にあることが挙げられる。

最後に、③の理由は、事態の切り替わりを表す要素を含む文が選択される際、スポットライ



トの当たる範囲や事態の切り替わる時点の意味づけが異なる要素が複数存在することに起因すると考えられる。

以上、ここでは、近代の日本文学作品中の「～ようになる」がどのような中国語に翻訳される傾向にあるのかを示すとともに、その理由を考察した。

## 6. お わ り に

本稿では、近代の日本文学作品中で用いられる、状態変化を表す「～ようになる」がどのような中国語に翻訳されやすいのか、また、その原因が何であるのかについて分析を行った。その結果、まず、翻訳のされ方として、状態変化後の新事態のみを表す文が半数近くを占めていたこと、それ以外の訳し方には多様性が見られることが明らかとなった。また、この理由として、中国語の語りでは、定着度の高い事態 A が、別の定着度の高い事態 B へと移行する全過程にスポットライトを当て一つの文として描く表現方法がなじまないことが示唆された。しかしながら、このような語りのスタイルの相違については、さらなる検証が必要であろう。この点は、今後の研究課題としたい。

### 注

- 1 菊池 (2017) は、論文中で繁体字の「變」を用いている。本稿では、菊池からの直接引用部分を除き、中国語の漢字として簡体字の「變」を使用する。
- 2 「青空文庫」 <https://aozora.gr.jp>
- 3 安達 (1997) は、「形容詞は『ようになる』構文は取らないが、これはより単純な表現として『連用形なる』型がすでに存在しているためだと考えられる (p. 80)」と述べている。次の (i) はその根拠として安達が示した例である。
  - (i) a. \*私は寂しいようになった。(安達の (71a))
  - b. 私は寂しくなった。(安達の (71b))
 また、「否定文については、判断が微妙になる (p. 81)」とし、「これも、『ようになる』よりも『連用形なる』型で表現されるのがふつうであると思われるが、実例もまれにみることができる (p. 81)」と述べている。このように現代語においては、「形容詞文」「否定文」は「ようになる」に埋め込まれるよりも、「連用形なる」型で表現される傾向にある。
- 4 以下が「その他」の例である。
  - (i) a. ふと自分が此の母子と運命を共にでもするようになったら、とそんな全然有り得なくもなさそうな人生の場面を胸のうちに描いたりした。(菜穂子, 13)
  - b. 他甚至默默地设想过这样的人生画面：自己何不同这对母女一起承担起未来的命运？(菜穂子, 13)
 (ib) を日本語に訳すと「自分はなぜ此の母子と運命を共にしないのだろうか」となる。仮定を表す「たら」に埋め込まれた「～ようになる」が疑問文に翻訳されている。
- 5 方向補語「起来」も、動詞「开始」と同様、事態の開始を表すのに用いられるが、原 (2010) は、両者の相違について以下のように分析している。

- (1) “V 起来” は自然に「なる」のに対し, “开始 V” は意志をもって「する」。
- (2) “V 起来” は動作対象の目的語をとりにくいのに対し, “开始 V” は動作対象の目的語を容易にとる。
- (3) “V 起来” は“得”字句の補語になるが, “开始 V” は状態化以前にあると言える。
- (4) “V 起来” は動作主体が主語でなくてもよいが, “开始 V” は動作主体が主語でないとき不自然になる場合がある。

(p. 84)

6 楊 (2013) は, 語気助詞「了」の統語制約として, (ib) のような説明句, (ia) のような描写句に語気助詞「了」が使えないこと, (iiib) (ivb) のように副詞の「才」「刚」と語気助詞「了」が共起できないことを示している。

- (i) a. 他是坐**车**来的。(楊の⑱ a)  
b. \*他坐**车**来了。(楊の⑱ b)
- (ii) a. \*大家又**说**又笑了。(楊の④⑤ a)  
b. 大家又**说**又笑。(楊の④⑤ b)
- (iii) a. 他十二点**才**睡**觉**了。(楊の③⑩ a)  
b. \*他十二点**才**睡**觉**了。(楊の③⑩ b)
- (iv) a. 小李**刚**到日本。(楊の③⑦ a)  
b. \*小李**刚**到日本了。(楊の③⑦ b)

## 参 考 文 献

- 安達太郎 (1997) 『「なる」による変化構文の意味と用法』 県立広島女子大学編『広島女子大学国際文化学部紀要』4 pp. 71-84
- 庵功雄 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 植松容子 (2016) 「中国語母語話者は『ようになる』と何を類義表現と捉えるか—対照研究と誤用観察から分かること—」 昭和女子大学近代文化研究所編『学苑』910 pp. 27-36
- 菊池律之 (2017) 「台湾人日本語学習者の『動詞ようになる』の習得について」 天理大学編『天理大学学报』69 (1) pp. 31-41
- グループ・ジャマシイ編 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- グループ・ジャマシイ編 (2001) 『教師と学習者のための日本語文型辞典 中国語訳 繁体字版』くろしお出版
- 原由起子 (2010) 「“V 起来”, “开始 V”, “开始 V 起来” の違いについて」 姫路獨協大学外国語学部編『姫路獨協大学外国語学部紀要』23 pp. 77-92
- 楊凱榮 (2001) 「中国語の“了”について」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』 pp. 61-95 ひつじ書房
- 楊凱榮 (2013) 「从表达功能看“了”的隐现动因」汉语学习编辑部編『汉语学习』第5期 pp. 31-43
- 渡邊ゆかり (2019) 「中国語を母語とする日本語学習者の『動詞—ようになる』の習得について—状態変化を表す『動詞—ようになる』の習得上の問題—」 広島女学院大学大学院言語文化研究科編『広島女学院大学大学院言語文化論叢』22 pp. 1-18

## 調査に使用した日本語書籍 (3 節 1 項の作品番号と対応)

1. 夏目漱石著『吾輩は猫である』新潮文庫, 1961
2. 夏目漱石著「ころろ」『ころろ 坊ちゃん』文春文庫, 1996
3. 夏目漱石著『三四郎』新潮文庫, 1948
4. 谷崎潤一郎著『痴人の愛』新潮文庫, 1947
5. 谷崎潤一郎著『細雪 上』新潮文庫, 1955
6. 堀辰雄著「風立ちぬ」『風立ちぬ／菜穂子』小学館文庫, 2013
7. 堀辰雄著「菜穂子」『風立ちぬ／菜穂子』小学館文庫, 2013
8. 太宰治著『惜別』新潮文庫, 1971
9. 太宰治著「斜陽」『斜陽 人間失格 桜桃 走れメロス 他七篇』文春文庫, 2000
10. 太宰治著「人間失格」『斜陽 人間失格 桜桃 走れメロス 他七篇』文春文庫, 2000

## 調査に使用した中国語書籍 (3 節 1 項の作品番号と対応)

1. 夏目漱石著, 刘振瀛訳 《我是猫》上海译文出版社, 2018
2. 夏目漱石著, 章蓓蕾訳 《三四郎》湖南文艺出版社, 2018
3. 夏目漱石著, 林少华訳 《心》中国宇航出版社, 2008
4. 谷崎潤一郎著, 林水福訳 《痴人之愛》湖南文艺出版社, 2017
5. 谷崎潤一郎著, 储元熹訳 《細雪》上海译文出版社, 2011
6. 堀辰雄著, 施小炜訳 《起风了》华东理工大学出版社, 2016
7. 堀辰雄著, 孙雅甜訳 《菜穂子》南海出版公司, 2014
8. 太宰治著, 杨晓钟ほか訳 《惜別》陕西人民出版社, 2017
9. 太宰治著, 周敏珠訳 《斜阳》吉林出版集团有限责任公司, 2009
10. 太宰治著, 周敏珠・许时嘉訳 人間失格《斜阳 人間失格》九州出版社, 2017